

赤嶺さん家の友奈さんが学校へ行くそうです

バロックス(職場の鼠を狩ります)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、神様は思いました。

「この子、最近働き過ぎじゃない?」

神様は自分で呼び出しておいて御役目の為に身を粉にして自ら悪役を演じる少女に、
自分は何かできないかと考えました。

試行錯誤の末、神様は思いついたのです。たまには、未来の世界の為に頑張ってくれ
ている少女を勞つてやろう、と。

神様は人並みに学校生活を送らせてもらえなかつたであろう少女を学校へ行かせよ
うと決めたのでした。

目 次

第一話　魔法にかけられて	12
第二話　あなたが羨ましい	1
第三話　あなたの事を教えてください	
第四話　貴女には逆らえない気がした	
第五話　乃木園子の魔の手	
60 44	32

第一話～魔法にかけられて～

——これは、一人の少女の物語。

——儚くて、いつか終わってしまうこの世界で、
——魔法をかけられた少女が一生懸命頑張つて、今まで知らなかつた何かに気付く
物語。

少女は願う、

“魔法よ、どうかまだ解けないで”、と。



——徳島県・山奥のどこか。

人の気配を感じない山の中を、一人の少女が駆ける。

沖縄人特有の日に焼けた肌が身にまとつた装束から露わにし、時に地を発ち、宙へ舞えば美しい緋色の髪が揺れる。

勢いを落とさず、木々を伝つて飛び移つていく姿はまるで猿か、忍者のように。一際大きめの木の枝を見つけ、渾身の力で踏みつける。

尋常ではない『勇者の力』で枝はしなるよう曲げられ、次の瞬間には枝をジャンプ台替わりに大跳躍をした少女が緑の結界を抜け、雲が見える空へと身を投げ出した。

浮力を感じ、次第に重力で落下する身体の軸を整える。

時速が80kmを超えて地面と衝突すれば大けがでは済まされない一大事に顔色一つ、むしろ笑みを浮かべた少女は体操選手の如く、羽のような身軽さで地面へと着地を決める。

「あのさあ造反神様……もう一回言つてくれない？」

赤嶺友奈あかみねゆなが着地姿勢から立ち上がり、自身の主である造反神への質問を虚空へと投げつけた。

四国を守護している土地神、神樹が作り出したこの世界でその敵対勢力である造反神

の勇者として召喚された赤嶺は鍛錬の最中であつた。

勇者部が力をつけている現状、赤嶺自身も強くなることを求められている。その為に日々の向上、鍛錬は欠かせない物だつた。

既に造反神が奪つた四国の領土も勇者部に奪い返され、残すは徳島と高知だけとなつた戦況で作戦の指揮官でもある赤嶺は勇者部との決戦に備え、一分一秒を無駄にできない。

そんな焦燥に駆られる赤嶺の一連の動作を止めさせるに至つた主、造反神の言葉を赤嶺は再度口にする。

「私に『学校へ行け』……つて、どういうこと？」

造反神の言葉は正確に耳に届くものではなく、脳内へ語りかけるものである。

それは造反神が姿形を持たない精霊的な、神秘的な存在だからか、はたまた顕現するのが面倒くさいだけなのか、赤嶺とのコミュニケーションは依然どこの形式を維持している。

その主、造反神が言つている。『赤嶺、学校へ行きなさい』、と。

「学校つて……勇者部がいる讃州中学？ いやいや、造反神様……だいぶ前に部室に乗り込んで私がコテンパンにされたの覚えてるよね？」

敵情視察しようにも向こうも警戒度上がつてゐるし——え?』

赤嶺の言葉を遮るように造反神の言葉が頭へと流れてくる。

『生徒として学校生活を送りなさい』つて……ムリムリムリ! 何言つてんの造反神様!!』

空に対して手と、顔を振る赤嶺は自身の主の提案に拒否の反応を見せる。

「今は大事な御役目の真っ最中でしょ? 徳島決戦、高知最終決戦までもう時間も少ないって思つてゐるのに……そんな状況で学校生活なんて……」

神世紀、旧世纪の時代に生きる勇者を集めて行われるこの戦いは、未来の人類存亡を左右するものだ。勇者達に試練を与え、特定の人物に懸けぶりをかけ、それを踏破した先に見える可能性への示唆。それを実現させるための戦い。

赤嶺にとつての御役目はそういうものである。

だからこそ、戦いも佳境を迎えているこの時期に勇者部が居る場所で学校生活を送るなど、その理由は全く持つて理解できなかつた。

『お前が尊敬する勇者、古波蔵棗と一緒に学校生活を送りたくないのか』つて……そりやあ、棗お姉さまと一緒に空間にいられたら……う、うれしいけどっ!!』

それでも、敵陣の真っただ中に居座るという赤嶺の心中は、心労は計り知れない。赤嶺にとつて憧れの勇者が居ても、その隣には他の勇者が何十人もいるという状況である。

『だつたら行けばいい』

今度は脳内ではなく、明確な言語として赤嶺の耳にその言葉が届いた。本気を出せばちゃんと耳に届くようになるんだ、と新たな発見をした赤嶺を余所に造反神の言葉は続く。

『この世界の記憶は持ち帰る事はできない。お前もそれは分かつていてる筈だろう?』
「そうだけど、さ」

神が作つたこの世界で行われる戦いはこちらの、造反神の領土を奪いきるまで続く。勇者達は年齢を重ねること無く、

怪我はすれど病むことが無く、
四季だけが永遠と移り変わる。

限りなく永遠とはいえないこの世界だが、現世で心に傷を負つた勇者はその傷を癒し、

その時代で遭えなかつた者、わだかまりを抱いていた者同士の願いを叶える。

そんな、理想と優しさで心の隙間を埋めていく世界。人々にとつて都合のいい世界。

しかしそれは紛うことなく、偽りのものだ。

夢が醒め、現実へ戻るよう、この世界もいざれ終わりを告げ、その記憶は持ち帰る事は出来ない。

『お前はそうやつて、やらずに後悔するつもりか』

「わ、私……みんなとワイワイやるの、苦手だよ」

『どうか？その割にこの前のエイプリールイベント、やけにノリノリだつたじやないか』

「ちよつ！ 造反神様見てたのつ!? 趣味ワルツ!!」

先日のエイプリールフルーツを利用して乃木園子に化けた赤嶺が勇者部を共倒れさせようと画策したことを引き合いに出され、赤嶺の顔が恥ずかしさから赤くなる。

結局寸でのところで乃木園子本人からの問い合わせで正体を隠しきれなかつた為に計画は失敗に終わつたが。

『あの時のお前は、そう……楽しんでいたんだろう?』

楽しかつた。

同じく、もしくは近い年頃の少女と、同じ御役目を持った勇者とお祭りのようにハチャメチャに過ごす――。

大赦の暗部組織の一員として生きていた赤嶺にとつて、その喧騒さや同年代の少女とのやり取りは目を背けたくなるくらいに眩しく、憧れる物だった。

それを見抜かれたか分からぬが、自身が一度襲おうとした可愛らしい巫女の少女に純真無垢な笑顔で“イベントに参加してください”と言われたのを思い出す。

『なら、時間がある内にやりたいことをやりなさい。思い残すことがないように』

「け、けど……今まで色んな酷いことしてきたし、向こうも敵が居るって知つたら――」

『その姿でなければ、問題あるまい』

突如として赤嶺の眼前、天から光が降り注ぐ。地面上に当たられた光が粒子を生み出し、一つ一つが結合し、ひときわ大きな形へと姿を変えていく。それはやがて、人の形になつた。

背は赤嶺と同じ、だが容姿が全く異なる少女が赤嶺の前にいた。
自身とは真逆の白い髪に、陶磁器のような色白の肌、どこか神秘的な雰囲気を思わせる顔立ち。

『この姿を借り、讃州中学へ行けばよい。いわば、お前の2Pカラーダ』

「いや、そんなルイージみたいな……ホント、よくできるよね」

「ぷに、と少女の頬を抓つてみるとそれは確かに人の肌の弾力で、髪の質も、少女特有の甘い香りも再現されている。

女性特有のこの二つの胸も、

「え、胸って私のより大きくなない？」

『そんなことは無い、バスト、ウエスト、ヒップ……ともに赤嶺を元に作り上げたつもりだ。

見間違いだろう』

この変態神様め、勇者パンチを食らわせてやろうか、と密かな殺意を抱いた赤嶺である。

『ついでにこの少女は仕事の都合で転校してきた病弱少女という設定つきでな』

「造反神様って、やっぱソツチの趣味あるの？」

よくよく思えば、自身の勇者服も他の勇者達とは違い、肌を露出する傾向が強い。これは全て造反神が与えてくれた勇者服なのだが、今回の事を機に、赤嶺は神とは一体なんなのか改めて考えさせられるだろう。

神様は実は変態集団の集まりなのでは？と。

『じゃあ明日から学校生活始まるからヨロシク』

「また急だよね」

『編入手続とか部屋配置とかはこっちでやつておくから、お前はもう寝なさい』
「そんなことができるの？」

『神様舐めんなよ？』

「造反神様……めっちゃ有能でフランクじゃん」

『こっちの方が色々と接しやすい。向こうの神樹もこんな感じでやり取りすれば楽な
のにな』

「それ、わっかる！」

何かしらため息のような音が聞こえた気がした。造反神のものだろうか、そんなことを
考えていた赤嶺に造反神の言葉響く。

『一つだけ問題がある、それは――』

造反神が語る全てを聞いた赤嶺は少しだけ悲しげな表情の後で笑って、頷いた。



——讃州中学、2年教室。

一人の少女が黒板を背に、教壇の上に立っている。

白銀の輝きを持つ白髪に、陶磁器のような白い肌をもつ少女の神秘的な雰囲気に教室内の生徒たちは小さいざわめきを隠せない。

「東郷さんすつごいキレイな子だよね！」

「……そうね、でも友奈ちゃんの方が勝つ^{まさ}ているわ」

そのクラスの中には見知った顔がある。ひそひそと繰り広げられる話の内容は全体的に似たようなものだった。

これほどの人前に晒されることにあまり慣れていない少女だが、たん、と踵を返して黒板と向き合い、チョークを手に取つては分かりやすく文字を書いていく。

文字を書き終え、再びクラスの前に正面を向けた少女はにつこりと、天真爛漫の笑顔で言うのだ。
「神舞白奈^{かみまい しらな}って言います。 今日からよろしくね！」

神舞白奈。

それは、赤嶺友奈の仮の姿ある。

こうして、赤嶺友奈の、神舞白奈としての讃州中学での学園生活が始まつたのであつた。

——これは、一人の少女の物語。

神様に魔法をかけてもらつた少女が、願いを叶える物語。

第二話～あなたが羨ましい～

「で、あるからして――」

春の風を既に運び終え、ほんわりとした温かさが残る教室に国語教師の言葉が響く。

クラスの生徒は教科書と向き合い、静かに教師の授業に集中している。なんと真面目なクラスか、校長先生が見れば満面の笑みを浮かべるだろう。

「友奈ちゃん、起きて起きて」

「ふえ……棺、が648……むにゃ」

否、それは間違いである。このクラスで授業を真面目に目を見開き教科書を見つめ、尚且つ教師の言葉に耳を傾けている優秀な生徒は半分くらい。残りの半分は春の温かさに充てられ、静かに寝息を立てているのが現状。

真面目な生徒の部類である東郷美森が、夢の世界で何故か棺を数えている結城友奈を起すためにその肩をゆすっている。

だが美森の努力も虚しく、数秒後には寝入っている姿を捉えた国語教師が厚さ5センチと満たない教科書の面で団扇を薙ぐように、そして乗せるようにして寝息を立てる友奈の頭部を叩いた。

「最近は生前葬するためにマイ棺を購入する人が増えているみたいですね、結城さん」
「……はっ！ か、覚醒ツ 起きているであります先生！」

現実へと強制的に引き戻された友奈が席から立ちあがり、口元から垂れる涎に気付くことなく言い訳交じりに答えていた様に、くすり、とクラスから笑い声が漏れる。

恥ずかしくもはにかみながら後頭部に手を回し、自身の席へと座り込んだ。授業は即座に再開される。

・ ・ ・ ・ なあにやつてるんだか。

その席と対になる位置。

友奈と美森の教室後部、出口に最も近い場所からちょうど真横にある窓際の隅つこの席でその光景を眺めていた白髪の少女がいる。

「ふあ……」

神舞白奈、もとい赤嶺友奈は溜息と同じように小さく、欠伸が漏れる。

特に寝不足ではないというのに、四月という季節は人々を堕落させるというのは本当らしい。戦闘訓練を受け、精神的に油断も隙もない程に鍛錬をした自分も眠気を帯びているのだから、その魔力は本物なのだろう。

「春眠暁を覚えず――、だつけ……昔の人は偉大だねー。 最初は色々と戸惑つたけ

ど

手にしていたペンを回したりして遊びながら残った手で頬杖をつく赤嶺はこの学校に編入した後の、ここ2、3日を振り返る。

とにかく、質問責めであつた。

席がこの窓際という場所に決まり、ホームルームが終わりを止めた瞬間、クラスの男女が一世に赤嶺に向かつてダッシュする。

ものの数秒と経たずに囮まれ身動きできなくなると、

“どこからきたの？”

“髪キレイ、ホント日本人？”

“部活動なにやるか決めた？”

“レツツエンジョイ・香川ライフ？”

などの似たような質問が同時に全方向から寄せられるたびに赤嶺は新手の拷問かと思つたくらいだ。

授業が始まるまで質問は終わらず、そして授業終わりの休み時間もそれは終わらな

い。

ここまで注目を集める理由はこの造反神が作り出した赤嶺の分身、神舞白奈の容姿にあつた。

自身の主の趣味なのか、高知から転校してきたというこの少女、神舞白奈は白銀のような髪、透き通るような白い肌という日本人離れした容姿を持つ。

造反神曰く、白髪で不思議オーラ満載の美少女はクラスで注目の的になりやすいらしい。疑わしい限りだつた赤嶺が実際に面倒な事態に遭遇しているので間違いではなかつたのだと、当時はその設定を施した主に怒りを芽生えさせたものだ。

・・・・そんな目を惹く容姿だつたのは驚いたよね……みんなが見た目に騙されるだけなんだけどさ。

赤嶺が今成り代わつている少女、神舞白奈には幾つか仕組みがある。

まず一つは、正確には完全に赤嶺と分離した肉体ではないということ。

その正体は人一人分を覆つて いる転身結界能力『IZANAGI』であり、術発動後は術式に組み込まれた神舞白奈という擬似精霊を同化させ、表面に白奈の肉体を出現させて いるだけなのだ。

つまりは着ぐるみである。

二つ目は、結界は赤嶺の意志で解除が可能であり0・5秒のプロセスでタイムラグを起すことなく本来の赤嶺の肉体に戻る事が可能であるということ。

これにより、本来の赤嶺が行う御役目に出るであろう支障は無くなつたと言つても良い。

三つ目は――、

「あ、神舞さん。 授業終わつたよー」

もう一つの仕組みを思い返そうとした時、クラスの生徒に声を掛けられる。

気づけば授業の終わりを告げるチャイムが鳴つていたらしく、皆が次の授業への準備をし始めていた。

「うげ――」

赤嶺の表情が一瞬だけ曇る。生徒がそれぞれタオルやらスポーツドリンクを持ち出して更衣室へ向かう光景が赤嶺の頭を悩ませる要素になりつつあつた。とはいえ、授業に遅れるのはまずいので自身も準備を始める。

――二年の次の授業は体育だ。



「そおーれいッ！」

青空の下、讃州中学のグラウンドで快活な少女の声が上がる。二年生の対抗チーム戦で行われているのは男女別で行われているサッカーで、今は女子のクラス対抗戦である。

女子がメインのサッカーということもあり、試合の内容は男子よりもやや見劣りするものだ。

女子生徒の中にはサッカー部や運動部に所属している者や“運動部でもないにも関わらずエゲツナイ身体能力を持つ者”がいるが、チーム戦である以上は能力に個人差が生まれ、両チームとも絶妙なパワー・バランスの関係の元、一方的な試合展開にはならない。むしろグダグダに近い。

「ばーす！」

そんな言い方が悪いかも知れないが、レベルの低い試合展開の中で異質を放つ少女が

居た。

景気の良い声でボールを受け取った少女は徐にボールを蹴り、ドリブルでグラウンドを駆ける。

2、3人ほどのディフェンスが少女の前に立ち塞がるがそれは素人だ。運動部で多少反応速度は並程度のものがあるが、その少女にとつては相手の目線、関節の動き、重心の傾きからどの方向に動こうとしているのかが分かるため、そのドリブルを止める事は叶わず、躊躇される。

「ボールを相手のゴールに……シュートオ！」

相手陣地のゴールまで20メートルを切つた神舞白奈こと、赤嶺友奈が右足を振り抜く。

さつきまでの曇った表情はどこへやら、術式に関する懸念事項の件もすっかり忘れた赤嶺は純粹にサッカーを楽しんでいたのであつた。確かな弾力性を持つサッカーボールは真っ直ぐに、ディフェンスによつてさえぎられることなく、ゴールを目指す。

たとえ術式によつて姿が変わつていても、中身は赤嶺友奈の身体である。このように、普段の赤嶺が持つ生身の身体能力で活動することも可能だ。幼い頃から大赦の戦闘訓練を受けている赤嶺を並みの運動部ではドリブルもシュートも止める事は難しいだ

ろう。

「勇者パアアアンチツツ」

そう、相手が並みの運動部でなければ。

赤嶺の渾身のシュートを正拳突きで弾き飛ばし、ゴールを死守した結城友奈が即座に前へと転がったボールを抑える。この少女は紛れも無く『運動部でもないのにエゲツナイ身体能力を持つ者』の一人だった。

「好守備よ友奈ちゃん！やはり御国の守護神は友奈ちゃんしかいないわ！」

歓喜、というよりは蕩けた表情で友奈のファインセーブを讃えるのはデイフエンダーの東郷美森だ。友奈はいえい！とピースサイン送つている。

・・・・やはり結城友奈、只者じやない……。

常人ならば反応出来ない速度で蹴り込まれたボールを、パンチで止めたことに赤嶺がその手強さを実感させる。勇者としての実力以前に、自身の身体能力も高いとあれば必然的に強敵となるだろう。

「はんげーきつ！」

間の抜けたようで芯が通っている、というのだろうか友奈が蹴り込んだボールが空高く上がり、赤嶺の頭上を越えてハーフライン手前まで戻される。

赤嶺の陣地の守備は攻撃に人数を割いていた少ない。敵のラインが必然とあがり、今度は赤嶺の陣地でボールの争いが始まる。

足りなくなつた守備を赤嶺が自陣へ戻る事でその空いた穴を塞ぐ。自陣の守備を戻せば良いのに赤嶺自身がデイフェンダーに加わること、それには理由がある。

「いっくよー！ 白奈ちゃん！」

猛然と、そしてゴールキーパーであるにもかかわらず、結城友奈がオフェンスの一員としてダッシュで駆け上がつてくるのだ。

突つ込むのを我慢していた赤嶺だがついに限界だと思い、口を開く。

「いや！ ゴールキーパーが前に出てきてどうするの！ 誰がゴール守つてのさ！」
「東郷さんがいるからッ！ α 波の手の動きでなんとかするつて！」

・・・・だからそれハンド！ 反則だつづーの！

両の手を前にだし、怪しげな動きをしながらゴール前に立つ美森を目に入る。ルールを知らないのだろうか。

「ふつふつふ……私も忘れて貰つちゃ困るんだなあ、お二人さん」

「うげ」

「あ、高嶋ちゃん！」

結城友奈と似た容姿を持つ少女、高嶋友奈が不敵な笑みを浮かべていた。二年生女子の対抗戦が故に、別クラスである高嶋が出てくるのは分かるが。

・・・同じ場所に友奈が三人。

見た目は違うとしても、奇しくも同じ場所に『友奈』と名を持つ少女が集まつた瞬間だつた。しかし、赤嶺の本来の姿でここにいなくて良かつたと内心で胸を撫で下ろしている。

もし本来の姿でこの場所にいたら友奈と同じ顔が三人もいるということは流石に絵図からして色々とマズイ。

三つ子説、カードゲーム好きの男子からのネタにされることは出来れば避けたい。

ちなみに別クラスの友奈と高嶋が一緒にいるかと言えば、高嶋のチームに負傷者が出了のでその補填として友奈が選ばれたのと、

『友奈ちゃんが行くところにこの東郷美森ありツツ』と、他を寄せ付けぬ威圧感で勝手に美森が寝返つたからだつた。

異論は認めないツツ』と、他を寄

身体能力も他者とは抜きんでている。正直、赤嶺一人でも手に余るくらいだ。その証拠に、

「マイティ友奈ズ！」

「ダブルエー一ツクス!!」

同じ友奈だからか、シンクロ率がやたら高い。というかこれ、その内自分もやらされそうで怖い。と密かに恐怖していた赤嶺だつた。

ちなみに赤嶺陣地のゴールキーパーはと言うと。

「ええ、大丈夫。私、高嶋さん以外のボールは止めないから。

逆に言わせれば、高嶋さんのボールだけは例え血を流しても受け止めるから。

あわよくば自分ごとゴールされて『郡千景が高嶋友奈にゴールされた、ゴールインした』なんて強引に多幸福感を味わおうなんて微塵も思つてないから……だから邪魔する奴はブツコ——

強いんだか弱いんだかよくわからないことを言う黒髪の少女、郡千景から遠い目を見るようにして視線を外す。

ともあれ、相手が勇者としても力を持つ者で苦戦を強いられるというのは事実。

・・・・手加減、できないよね。

激しい戦いになることを承知で赤嶺の笑みを浮かべるのは、心が躍っているからだろ

うか。気付けば周囲の生徒たちも活気づいており、外野の生徒たちも声援を送つてきている。

それはチームへの声援だつたり、

友奈にだつたり、高嶋へ、白奈へ届くもので、不思議と内なる熱さが増していくのを感じる。

願わくば、この歓声に応えたい。味方からも、敵からも関係なく。

「緋色……舞うよ」

小声で、誰にも聞かされない程に呟いた赤嶺が自身へのリミッターを外したのだつた。

——その数分後。

「せんせえー！　白奈ちゃんが”また”倒れましたアー！」

地面に屍の如く倒れ込んだ赤嶺の横で友奈のヘルプの叫びが響いたのだった。



赤嶺は失念していたのである。神舞白奈の運動能力について。

神舞の姿で赤嶺が本来の身体能力で活動するには限度があるので。それは全て、この姿を作った主・造反神が組み込んだ『病弱』という設定。

赤嶺の肉体と同化した擬似精霊は本人の意志とは関係なく、その肉体に影響を与える。

それは『病弱』という設定を忠実に再現させ、通常ならばものともしない運動を行える赤嶺が機をせずしてぶつ倒れたのはこれが原因だ。

全力による運動時間僅か3分。それ以上全力で運動をしようものなら唐突にスタミナ切れを起して倒れる。

編入初日の体育でコレが発覚した時は、『どこのウルトラマンだよ！』と内心で突っ込んだ赤嶺だった。

「うへー……」

保健室で横になつている赤嶺はそんな事を回顧する。当然、体育の授業を抜けてこの場所に連れてこられた赤嶺は体力の回復を図る。

身体が熱をもつてているのか、身体から汗が引いていかない。まるで火に炙られているようだ。

・・・・心底恨むよ、造反神様。

この身体になつて、これから何度も恨むことになるであろう自分の主を思い浮かべるその隣で、

「あ、タオル変えるねー」

結城友奈がいる。水を含ませたタオルを赤嶺が今乗せている物と交換させた。ひんやりとした感覚が額に集まるのがとても気持ちが良い。

交換したタオルを水を入れた桶に浸し、力強く絞る。人に奉仕することが当たり前なのか、その手つきは手馴れていた。

「ごめんねー、白奈ちゃんが調子悪いんだって忘れてて……でもあの時の白奈ちゃん見てたら全力でやんなかったら失礼だと思つて」

「謝らなくて、いいよ」

事実、倒れるまでの3分間、友奈と高嶋という二人を相手に赤嶺は互角の戦いを繰り広げていたのだ。

時間を忘れ、体力を忘れ、一つの勝負に没頭する感覺を赤嶺は倒れてしまつた今でも悪くは無かつたと思つてゐる。むしろ、

「私も、楽しかつたから。何もかも、忘れちやうくらい」

そう言つて、布団で顔を隠した。

「どううか、そろそろ教室に戻れば？」

「だいじよぶだいじよぶ。先生にはもう連絡してゐるから」

「へ？・・・・なにを？」

「私が白奈ちゃんのお世話をすることを」

どうにも、この少女は自分が回復するまでここで世話をすることもりらしい。流石に昼

休みの間だけだと思うが、本来、結城友奈は赤嶺にとつての敵の勇者である。

その相手から看病されるというのはどうも癪だと思わざるを得なかつた。

「だめ、かな？」

「べ、べつに……いいけどさ」

「やつたー！」

・・・・・犬か。

万歳するほどまでに手を広げた友奈に赤嶺は視線を外すように真横になつた。

結城友奈。神世紀において、歴代最高値の適性を持つ勇者。

この世界での戦いの後、人類の行く末を左右するポジションに値する少女。一見天然で、間の抜けた少女だと一部の人間は思うかもしれない。

だが、その内に秘められた意志の強さがあるのを、赤嶺は勇者パンチの一騎打ちで身を持つて知っている。

力と技量は勝っていても、繰り出された拳には計り知れない『想い』が込められていて、赤嶺はそれに押し返された。

そしてその手は敵を倒すためだけの拳ではないことも、赤嶺は知っている。この保健室に運んできてくれたのは他ならぬ、結城友奈だつた。

『はいはーい、白奈ちゃんが困ってるから質問するなら順番にー！』

思えば質問責めにされていた昼休み、赤嶺に助け船を出してくれたのも彼女だつたと、赤嶺は思い出す。

・・・・・正直、うらやましいよ。

同じ容姿を持つのに、その手が行ってきた所業は全く持つて真逆。

大赦の暗部に所属するということは、『そういうこと』を行わなければならない。必然的に、赤嶺の手は汚れている。

だから自分とは逆に誰にでも優しくその手を伸ばし、自分の意志を貫き通せる力を

持つて いる 結城 友奈 が 眩しく 映つて 見えた。

そう思いに耽る赤嶺に、

ひやうつ!

気づかれなかつたのも確かだが、唐突に友奈が赤嶺の髪を、白奈の白髪に触れていたのだ。友奈は撫でるように触つていた手を一旦引つめる。

「いやー、白奈ちゃんの髪つてキレイだよね。
く、くすぐつたい……！」

・・・・二、この子、誰にでもこんな感じなの？

フレンドリーと言わればそれまでだが、スキンシップを気軽に使える行動力の高さに赤嶺は恐怖する。

はあ

抵抗する気も無く、されるがままに髪を触れさせる赤嶺がため息をついた。

「どうしたの白奈ちゃん。なにか悩みでもあるの？」

別に……これから色々大丈夫かなって、不安に思つただけ……」

すると即座に、

返つてくる言葉がある。

「これからいい一っぱい、楽しいことがたくさんあるよ！ 私も力になるから、一緒に見つけていこう？ 勇者部五箇条一つ、悩んだら相談！ あ、勇者部つて言うのはね——」

それは漠然としていたが、どこか力があつて、この少女が言うならば、本当にそうなのだろう、と自然とそう納得してしまっている自分が居た。

状況が状況なのだから仕方ないが、敵に対してそんな言葉を掛けるなんて、

「まつたく、甘いよね」

「へ、なんて？」

「・・・・なんでもないよ」

ワザとらしくはぐらかして赤嶺は起き上がる。

「お腹、空いた」

それを聞き、はにかんだ友奈が立ちあがり席を外した。保健室から出たという扉が開く音が聞こえてから数分程経つと。

「じゃじやくん！ う・どーん！」

お盆に乗せられたうどんを赤嶺の前に差し出してきた。どうやら今日の昼食はうどんだったらしい。

・・・・・ま、そりやそうだよね。

ここは四国でもうどんの聖地、香川県。香川県内ならどこに行つてもうどんという存在は神格化され、万病に効くとすらされている。

それは神世紀序盤、赤嶺から居た時代からも変わつていなかつたようだ。
友奈は箸を持ち、うどんを掬い上げると、

「食べさせてあげる！」

うーん、この天然ジゴロっぷり。

有無を言わさずそのうどんを赤嶺の口へ運ぼうとしていた。しかし、いくら拒否をしてもこの子は食い下がつて来るだろう。

・・・・・ま、別にいつかア。

観念したように赤嶺が口を開く。既に友奈が息を吹きかけて冷まさせたうどんはすんなりと赤嶺の口に運ばれた。

本場香川のうどんといふこともあり、そのコシは程よく、違和感なく喉を通っていく。
やはりうまい。

「はい、あーん」

「あーん」

だが赤嶺は気付いていなかつた。

保健室の扉が僅かに開いていたことに。

「殺^{サツ}」

意図せずして甘つたるい雰囲気を醸し出す二人のその姿を東郷美森が色調を暗転させた瞳で覗いていたことを。

赤嶺友奈の、神舞白奈としての学園生活はまだ始まつたばかり。

第三話～あなたの事を教えてください～

——お昼休み。

讃州中学は屋上がある学校だ。

そこからは讃州市と海が一望できて、その景色は学生たちの間ではちょっととしたスポットである。

「……ん。 誰もいないね、つと」

屋上の扉を少し開け、顔だけを覗かせた白髪の少女、神舞白奈こと赤嶺友奈が周囲に人の姿がないのを確認して、やがて全身を屋上へ姿を現した。

生徒が座る時の為に用意されたであろうベンチに腰を掛けた赤嶺は、手にしていたバッグから長方形の箱を取り出した。

意気揚々に、鼻歌を混じらせて蓋を開けるとそこには白米と、色彩に溢れた野菜たちが。

「お弁当たーいむ」

昼休み、昼食を食べる為に赤嶺は屋上へとやつて来たのであつた。

正直、こここの数日で白奈に対する注目度はある程度は熱を引いてきたようである。

休み時間なども結城友奈などの計らいで質問の時間もちゃんと決められているので赤嶺自身にかかるストレスはなく、こうして昼休みも一人で自由に過ごす時間が出来たのだ。

「ふむ、我ながらなかなか……かな?」

箸で掴んだミニハンバーグを口へと運ぶ。

肉を咀嚼してその甘味を味わいながら喉へ通すと次には野菜であるブロッコリー、パセリ、次にハンバーグ、ブロッコリーと肉野菜野菜肉のサイクルで食べ進めていく。

『赤嶺ちゃんさア……クラスの子と一緒にご飯とか食べなよ』

突如として赤嶺の脳内に響く声がある。聞き覚えのある声とその内容に眉を顰めるのはその声の正体が主である造反神のものだからだ。

「別にいいじゃん。 私は一人で食べたいんだもん」

そう言いながら白米を口へと運ぶ。

赤嶺が一人で昼食をする理由は単純である。あまり人とガヤガヤするのが苦手なの

だ。

「結城友奈とかと一緒にいると同じ友奈だから色々と調子狂うっていうか……あと、あの東郷美森とかの視線が最近すごく刺さる物があつて……」

サツカーで赤嶺が倒れた辺りからだろうか、友奈と少しでも話そうとすると美森の色調を暗転させた瞳がひたすら赤嶺に向いているのだ。

それは若干ながら殺意を帯びている事に気付いた赤嶺は極力美森のまえで友奈と行動を共にすることは避けている。

『ぼっちかよ』

「ぼっちいうなし」

胸に何か突き刺さるような感じに襲われた赤嶺の手が止まる。

真正面から見える讚州市の海を眺めながら、赤嶺がため息をついた。

『楽しくないの？学校』

「うーん……なんていうか、まだ」

事実、ここに来てからまだ一週間と時間は経っていない。だからまだ思ってしまうのだろうか、初めて送る学校生活と言うのは“つまらない”と。

座学による授業、体育による運動、その他の女子との他愛のない会話。全てが赤嶺に
とっては初体験であり、最初は戸惑いもしたが時間が経てば人は慣れるものである。
環境そのものは新鮮なのが、そこには赤嶺を揺らすような刺激的な体験は未だに起
こつていなかつた。

「そもそも、この学校に來たのつて……棗お姉様と一緒にいられると思ったからだし。
でもお姉様は三年生、学年も違うし色々な人から人気があるわけだし、無理に近づけ
ないよ」

『ふーん、じゃあその古波蔵棗がいれば学校生活が楽しくなるんだ』

『なるほど、と造反神が頷くように呟く。

『赤嶺ちゃん』

『なに』

『右向け右』

「ちよつと造反神様、なんのお遊び——」

言葉通りに顔を右へと向けた赤嶺の瞳に、一人の少女が写り込む。

「あ……」

思わずそう言葉を漏らして、身体の動きが止まつた。

それは脳内の思考もまったくもつて纏まらなくなるほどの出来事であり、その乱

れた思考の中で何とか目の前の少女を表すなら、

この讃州中学とは違う制服を身に纏い、

灰色の髪と一本だけ伸びたポニーテール、

そして自身と同じ、沖縄人特有の健康的な小麦色の肌。

目の前にいた少女とは、赤嶺が尊敬する勇者・古波蔵棗、その人であつた。

「な、なななななっ!?」

なんでここに棗がいるのか、と造反神に問おうとする赤嶺だが棗がこちらに視線を向けていることに気付く。

黒の瞳が赤嶺を捉え、事もあろうかその足を動かし、徐々に距離を縮めてくる。

・・・・・造反神様聞いてる!? なんでここにお姉様がいるの……うわ、アイツ回線切りやがった。

何度脳内で赤嶺が造反神に呼びかけても反応はない。

恐らく聞こえているかもしれないが敢えて聞こえないふりをしているのだろう

か。後者だつたらだいぶ最悪な手口である。

その間にも棗は距離を徐々に消していく、

「……大丈夫か」

「ふえ……」

赤嶺の真横までやつて来た棗の開口一番が、それだつた。急にそう言われても、赤嶺としてはなんのことなのか理解できない。

「その……一人で何か喋っていたから」

・・・・聞かれてたアアア!?

氣恥ずかしさから顔を覆い隠したくなるほどに赤嶺の身体が熱を持つ。先ほどまでの造反神との脳内での会話は赤嶺にしか聞こえない。

故に、先ほどまでの会話劇は傍から見れば赤嶺がひたすら独り言を語っているようにしか見えないのだ。

「ち、ちなみにどこからどこまで」

「いや、内容は分からない……海を見ていたから」

そう言われ、内心で胸を撫で下ろす。

奇跡的にも海を眺めていた棗のお蔭で神舞白奈が造反神というワードを口にする危険な少女だと、そこから赤嶺友奈の正体がばれるような事にはならなかつた。

「私も、隣いいか？ 座るところが一つしか無くてな」

棗が手に持つていたお弁当箱を見て、赤嶺は息を呑む。そして思うのだ。

これは、すごくオイシイ展開なのでは？

西暦時代、当時の赤嶺家を救つた英雄である古波藏棗とともにお昼ご飯ができる、そんな夢にまでも見なかつた出来事に赤嶺の心が躍る。

「ど、どうぞ！」

かしこまるように、棗を座るためにその場に置かれていた自分のバッグを移動させた。キレイさっぱりに人一人分の空間を確保させた赤嶺はその手で棗を招き入れる。「すまないな……なぜ距離を取る」

「あ、その……気にしないで、ください」

「……？ そうか」

もともと深く考へることがない棗だからか、明らかに態度が可笑しくなつてゐる赤嶺に対して無理に追及することなくその場所に腰を下ろした。

その距離の理由は赤嶺が目を背けたくなるほどに恥ずかしくなつてゐるからだとは露知らず。

「ここ」の海は……いいな」

二人とも弁当を食べ終えて、早く數十分が経つ。

話す話題も何も浮かばなかつた赤嶺はただ棗と目を合わせることなく、黙々と食事を終わさせていたのであつた。

当然のことである。

赤嶺にとつて古波藏という名は神世紀で英雄と伝えられている名である。

赤嶺と古波藏は同じく沖縄の名である。それはバー・テックスが襲来する以前の沖縄県民であれば一般常識レベルのものだ。

だがバー・テックス襲来の際、四国へ脱出する際に身を張つて、逃してくれた勇者が居たという。それが古波藏棗だと、言い伝えられていた。

四国へと逃げ延び、命を繋いだ赤嶺家はその救つてくれた恩人である古波藏という名を後世まで残すこととした。

その名は赤嶺が居た神世紀序盤、四国の英雄の碑に刻まれている。願わくば、今の勇者の代でもそうなつていることを願う。

そんな個人的レベルに英雄視される実物の少女を前にして尊敬の意を持つ赤嶺が気軽に話しかけられる訳がないのである。

「そ、そうですね……」

棗の不意の言葉に合わせるように赤嶺が口を開く。

「だが、やはり故郷の海が……いいな」

この讚州市の海よりも、やはり故郷である沖縄の海が良いのだろうか。

バーテックス襲来前の世界の資料は決して多くは無いが、赤嶺が居た時代にからうじて残っていた沖縄の資料は確かにあつた。

常夏の地、沖縄。

空は青く、海岸の砂浜は白く美しく、
海は透き通るような翠色を思わせ、

陸より隔絶された海の世界は太陽に照らされた珊瑚礁が光り輝く。

・・・・私のご先祖の、本当の故郷。

教養として資料を目に通していた赤嶺も自身の先祖が暮らしていた故郷の姿に見惚れ、何度想いを胸に馳せたことか。

「綺麗な所なんですね……」

「ああ、皆さんに見せてあげたいくらいだ」

それを見てきた棗ならば、この讚州市の海は例え一般的に綺麗であつても、物足りなく感じるのだろうか。

勇気を出して、赤嶺は口を開く。

「聞かせて貰えませんか……おね、棗さん」

貴方が知る海を、

故郷のこと、

有名な食べ物のこと、

潮風の香りも、

そこで生きていた貴方のことを。

少しでも、棗のいた世界に触れてみたいと、知りたいと赤嶺は思う。

「白奈は変わっているな」

棗が苦笑交じりに口を開いた。

「私の話はそこまで面白くないぞ。あまり話すのは苦手でな」

「大丈夫です——つて、なんで名前知ってるんですか」

名を名乗った覚えはない筈なのに、と赤嶺は面を食らう。そんな棗は小さく笑つて、

「体育でのサッカー、みんなが注目していた。私もだ」

あの日、三人の友奈と繰り広げたサッカー対決。

異様にギヤラリ―が多くつたのは気付いたがまさかその観衆に棗が入つていたとは思わなかつた。

・・・・・お、お姉様が私を見ていてくれた!?

「その後、結城に抱きかかえられてたな」

・・・・・その後の事も見られていたとは。

不覚だ、と赤嶺は赤面する。あの全力全開でスポーツを堪能し、あまつさえ体力の限界から倒れるという失態を見せていたことに。

「そうだな——、じゃあ食べ物の話だな。私の知っている食べ物でソーキ蕎麦とい
うのがあつてだな」

棗は徐に語りだした自身の故郷の話を赤嶺は目を輝かせて聞くのであつた。

赤嶺は気づいているだろうか。自身の胸がこれまでかつてないほどに高鳴つ

ていることに。

そんな二人を屋上の扉の隙間から覗く者がいる。

「まさか勇者部以外でこんな面白そうな事が起きようとしてるなんて思いもしなかったんよ～」

メモ帳とペンを握つては仲睦まじく談笑する二人の少女を凝視し、神懸かりな速度で
ペンを走らせる少女の鼻息は荒く、その瞳は血走っていた。

「これは逸材だね～、是非とも我が勇者部に……ツツ」

　大物小説家、乃木園子がこれから起きてるであろう嵐を予感して、不敵な笑みを浮か
べるのだつた。

第四話～貴女には逆らえない気がした～

公平で、尚且つ単純なルールのもとに成り立つ、決の取り方とはなんだろう。答えはジャンケンである。

人が増えても単純にあいこになる確率は3分の1。二人で行おうものなら、さながら西部劇のガンマンの一騎打ちのようなスリルある真剣勝負が楽しめるだろう。

なぜそんな話をしたのか。

今まさに讃州中学の体育館でその真剣勝負が行われているからである。
ちなみに気になる対戦カードは。

「じゃんッ！」

「けんッ！」

神舞白奈と高嶋友奈だつた。
ぽん。

ほぼ同時にお互いが差し出した手を見合つて、神舞白奈に化けた、赤嶺友奈の口元が歪む。

赤嶺チヨキ、高嶋グー。

何故勇者パンチを出さなかつたんだと赤嶺は密かに後悔した。

「勝者～高嶋ア～」

「ツエーイ！」

まるで相撲の行司のノリで試合を仕切り、勝者の名を告げるのは結城友奈だ。友奈による仕切りのもと、友奈と友奈が見合つて行うガチのジャンケン対決。事情を知らない二人だが、赤嶺からすれば同じ顔の人間が集まつて同じ遊びをする…違和感がないというのが違和感か、それに頭痛を感じてしまつていて。

「ま、負けた……」

元々は唐突に仕掛けられたジャンケン対決。

ことの始まりは体育館で一人昼弁当を食していた赤嶺の元へ目を輝かせながら現れた高嶋が告げたのが始まり。

『じゃんけんしよーぶつ！ 贠けた相手は勝つた人の言う事を』何でも『聞く！』

と突如吹いた神風の如くバトルスタート。

出会つて3秒と満たない。ポケモントレーナーですら出会つてから戦闘が始まると10秒近くかかるというのに。

そして先ほど始まつて、結果はご覧の通り、

文字通り『敗北者』となつた赤嶺が両の手と足を地につけて項垂れている。

どこかでマグマを操る海軍大将の声が聞こえた気がした。

「ふつふつふ……それじやあ白奈ちゃん、約束：覚えてるよね？」

勝手に一瞬で始まり、一瞬で終わつた謎の勝負。

敗北の余韻に浸る間もなく、高嶋が不敵な笑みを浮かべて近づく。

「『負けたら勝つた人の言う事を何でも聞く』……さあ、私と結城ちゃんの言うことを『なんでも』聞いてもらうよ」

何故に『なんでも』を強調する。そこに意味はあるのだろうか。

しかし、造反神側の勇者、赤嶺友奈はここで反論の意志を見せ、抵抗を試みる。

「い、いや、でも勝手にそつちから仕掛けてきたんでしょう！」 私やるつて言つてないもん！」

「目と目が会つたときが、バトル合団だよ！ 私と白奈ちゃん、偶然にも目が合つたわけだし」

ああ、無慈悲。

そもそも目と目が合う瞬間、即バトルつてなんだ。ポケモン厨か、お前らは。

「結城ちゃんも見たよね」

「え？ あ、うん……ええと」

笑顔で同意を求める相手、もう一人の友奈、結城友奈は高嶋の言葉に若干戸惑いを見せている。

お前は敵だが、頑張れ結城友奈。今ここにいる高嶋^{暴君}を止められるのは唐突な樹海化現象が引き起こされる以外ではお前だけなのだから。

「見たよね？」

「え、ええと……」

「見たでしょ？」

「……うん見た、ごめんなさい」

満面の笑みで確かに圧を掛ける高嶋に、このド畜生が。

そう思わずにはいられない赤嶺だった。

『何でも言う事を聞くという条件のもと美少女同士でイチャイチャする素敵な展開……、あつ、赤嶺ちゃん気にしないでね。そのまま続けていいよ』

赤嶺の脳内に造反神の一いつのトーンによる声が響く。ド畜生はこちらの陣営にもいた。

小学生やら中学生などの若い少女を選別して強引に戦わせたりする神樹しかり、この造反神しかり、神様は変態が多いらしい。

「それで、私に何をさせるの？」

正直、どうにでもなれというのが赤嶺の率直な覚悟だ。安易な覚悟である。

高嶋はにつこりと笑いながら、

「そうだね、じゃあ結城ちゃん。白奈ちゃんを羽交い絞めして」

「はい」

操られた人形かよ。

まるで散華したような虚ろな瞳で赤嶺を拘束する友奈に赤嶺が疑問を投げかける。

結城友奈よ、お前はそれでいいのか。

逃げようにも、結城友奈単体でのパワーは少女に似つかわしくなく、強力なホールドである。

さながらプロレス技のごとき締め付けに赤嶺は全く動くことが出来ない。

「まさかだけど、友奈ネタをやるわけじゃ……」

「うーん？」

苦笑いで答える赤嶺。

以前のサッカーの授業中に見せつけられたマイティ友奈ネタを見せつけられた赤嶺はいざれこのネタを自分にやらせるつもりなのだろうと直感的に理解した。

勿論、同じ顔と声でそんなことをやらされたりでもしたら卒倒ものである。

この光景が映像にもし残されるようであるならば、先祖代々の恥さらしと呼ばれる羞恥プレイに発展させられることも避けられない。

対して高嶋は何か思い出したかのように手を叩く。

「それもいいかなーって思つたんだけど、白奈ちゃんに別の事で頑張つてもらおうかな」「が、頑張るつてなにを……？」

「……」

何故無言になつた。

その対応の意味を察することが出来ずに、赤嶺は恐怖する。
だから恐怖のあまり、声を上げた。

「や、やつぱむりッ！」

白奈の肉体で、本来の赤嶺友奈としてのパワーを發揮する。

白奈を拘束する程度に締め付けていた結城友奈の拘束を力任せに振り解き、全速で体育馆出口へとダッシュする。

「うわ、すごい速い！」

「ご、ごめん！ 次の機会に！ 都合があれば付き合うから！」

三分しか持たないこの全力ダッシュ。だが、この恐怖から逃れられるのであれば教室

ではぶつ倒れてもいい。

その覚悟で必死に走る赤嶺だつたが。

「駄目だよ白奈ちゃん」

10メートルは距離を空けただろうと確信した赤嶺の背筋を凍らせるような冷たい声。

高嶋友奈が眼前に仁王立ちしていた。

「ヒエッ……」

一瞬のうちに回り込まれたのも束の間、急ブレーキを掛けるも高嶋も赤嶺に向かうよう驅け出している。

距離は瞬時に詰められ、

「次なんてない……」

両の肩を掴んだ高嶋がまるで研ぎ澄まされた日本刀で赤嶺を引き裂くように告げる。

「敗者に相応しい結末をみせてやる」
エンディング

無慈悲を超えたハイパー無慈悲がそこにはあった。
赤嶺は思う。恐らく、結城友奈とか東郷美森よりこつちの高嶋友奈の方がやべーやつ
なんだと。

恐らく、自分はこの高嶋には絶対に逆らえないようになってるんだと。



赤嶺友奈は窓の向こうの景色を見つめ、想う。

今日の空はヤケに青いな、と。

「ああっ！　たかしー、ゆーゆー！そのまま位置固定でッ　たかしーはそこからしーな
ちゃんに近づいて顎クイツ！
もつと顎近づけてたかしーッ　もつとツ　もつとオツ!!」

赤嶺は羽交い絞めされたまま、勇者部部室に連れてこられていました。

「こうかな？」

「そうだよツ　いいねえ、イイよオ!!」

歓喜の声をあげ、恐ろしい速度でメモ帳に文字を書き込んでいるのは乃木園子だ。しかも中学生と小学生の二人である。

乃木家初代勇者、乃木若葉の紛う事なき子孫。

中学生の園子は神世紀において散華を繰り返し、瀬戸大橋の戦いを生き残り、その影響で21体の精霊を有する最強の勇者だ。

赤嶺がこの世界で一番警戒していた人物である。

〔鉛筆一本分の感覚で顔を近づけるんだよたかしー！　ヨシツ　きわどいツ　ここだアツツ〕

高嶋が園子（中）の言われたままに顔を近づけ、赤嶺の顎を小さく持ち上げる。

動くことも叶わず、逃げる事も出来ない赤嶺は、彼女にされるがまま。

それでも赤嶺は既に放心し、心を窓の外へと投げ出して心ここにあらずと言つた状態である。

神世紀、彼女たちの時代でいうなれば、『眼が散華』しているという状態は、こういう感じなのだろうか。

『ふむ。なるほど、普段強気な赤嶺ちゃんも、高嶋ちゃんのようなパワーあふれる攻めには為す術無し、か。赤嶺友奈総受け……これは土地神の皆も滾りますわ』

ちよつと何言つてるか分からない。

自身の主である造反神を真っ先に非難する赤嶺だった。

「はあ、はあ……もう一人の私、この世界に来て……私良かつたよ、今死んでも悔いはないツ」

「ふう、ふう……園子先輩、今世界がクリア見えます。これが進化ですね？ そうなんですね？」

荒い息を吐く園子達。

もう神様だけじゃなくてこの勇者も変態だろ、勇者システム取り上げなよ神樹様、どこが純粋無垢な少女だ。

虚ろな視線の赤嶺の脳内では激しい突つ込みが繰り広げられていた。

「それじゃあ次、行つてみようかア……流し目のたかしーと羽交い絞めしているゆーゆ

が――

「しーな先輩の耳に息を吹きかけて――」

それぞれの園子が言葉を完成させる前に、その肩を掴む手があつた。

「ねえ、そのつち。人が自殺するとき一番迷惑なのが首つりなんだけど、理由つて聞いたことがある?」

「園子さん。ハサミってさほど切れ味が良い訳じやないの。だから皮膚を切られると中途半端に、鈍い痛みが残るの……たとえば耳とかね」

「ヒエツ」

園子達の後ろで東郷美森と郡千景が瞳孔を開かせて二人を見つめている。

ギリツと園子達の肩に爪を食い込ませると同時に、まるで真後ろから銃を突き付けられて生殺与奪を余儀なくされた兵士のように血の氣の引いた顔の園子達が両の手を上げ、メモ帳を床へと落とした。

「えっと、その……ありがとう。東郷さん、郡さん」

数分程経つて、美森と千景の助けもあつてか、すぐに赤嶺は解放された。

赤嶺の瞳に生気が宿り、助けてくれた二人に感謝をする。

「大丈夫よ。こちらこそ、ごめんなさい、そのつちはいつもこうなので」
バリバリ、と園子が先ほどまで書き連ねていたメモ帳をゴミ箱の上で破きながら笑顔で言う。

「未遂に終わつたから良い物の、間違つて実行されてでもしてたら貴女も諸共……なんでもないわ」

いつから持つっていたのだろうか、と千景も園子が持つっていたメモ帳をハサミで容赦なく切断していく。

ついでに言い掛けた言葉が気になつた赤嶺だが深く問う事をやめた。

「ああッ！ わっしー！ 酷いよ！ 未遂だよッ!? しかも合意の上だよ！ 許してくださいッ！ 許してくんろッ!!」

「千景先輩ッ、御慈悲をッ どうか御慈悲を～～～～！」
ちなみに合意した覚えは赤嶺には無い。

この世の終わりを見るように美森と千景に割断され、ゴミ箱へ吸い込まれていく宝のメモ帳を園子達は涙ながらに返してくれと懇願している様は見ていて実に憐れだ。

だがどんなに悔いて願つても、それは叶わぬことだ。

冷徹な視線が返つて来るばかりである。

「そのつちはそろそろ加減とかを知つた方がいいわよ。……大喜利やらせるわよ？　いいの？バラエティに特化した勇者になつても？」

「そ、それだけは許して欲しいんようわつしー」

「自分のお金で買つた私服のセンスをデイスラレても？」

「やめて！　やめて千景先輩！　デスクイーン師匠！」

いいぞ、もつとやれ。この際、コイツの200冊以上ある謎のメモを全部取り締まつてしまえ、と思つた赤嶺である。

だが如何せん、昼夜みというのは限りがある。

そろそろここに連れてこられた理由を知りたい。

そう思つた赤嶺が口を開く。事の発端となつた園子へと照準を合わせ、

「ちなみになんで私は連れてこられたのかな？」

まさか園子さんたちのネタ帳に書かれるために呼ばれたんだとしたら流石に怒るんだけど

「あ、それはちょっとあるんだけど～」

あるのかよ。

と、中学生の園子の発言に憤りを感じた赤嶺。

すると小学生の園子が、

「ちゃんとお呼び立てした理由があるのです。今少し時間を待つてもらえたら、
「そう言えば、私達もそのつち達に呼び出されたのよね」

「ええ」

美森と千景もどうしてここに来たかと言えば、同じように園子に呼び出されたとのこ
と。

理由は聞かされていない辺り、自分と同じ状況なのだろうか。

「遅れてごめん！」

「お疲れ様です」

すると部室の扉が開き、中に入ってきたのは金髪の少女。

犬吠崎風とその妹、樹だ。

「防人組、六名到着」

今度は後ろから続くようすに楠芽吹とその防人隊員が。

「ほいっと、待つたかにやあ？」

秋原雪花が。

「神樹館組残り二名到着！」

「入ります！」

三ノ輪銀と鷺尾須美が。

ぞろぞろとなだれ込んでくる人物、それは全て勇者と巫女だということに赤嶺は焦りを感じる。

部室が超狭い……というか。まさか、正体がバレた？

思わず息を呑む赤嶺。これが赤嶺を捕まえる園子の作戦ならば、この状況で赤嶺が逃げる手段はない。

多勢に無勢。一人の赤嶺に対して十数名を超える勇者によつて袋叩きにされる恐ろしい光景が目に浮かぶ。

もはやこれまでか、短い学園生活だった。

そう覚悟を決め、今から変身を解き赤嶺友奈として部室で暴れようとしたその矢先、

「フツフツフ……皆、集まつたみたいだねえ！」

「聞いてほしいことがあるんです！先輩方！」

「なによ園子ズ。部員全員呼び出しきほどの……一体何を言うつもり？」

園子達の意味深な台詞に風が首を傾げた。

普段の行いが悪いからか、あまり園子達の奇行に全員の勇者達が身構えるほどであ

る。

「勇者部の新戦力を連れてきたんよ～」

そう朗らかな口調で園子が腕を伸ばす。

何故かそれは白奈である赤嶺お腕を掴み、グイッと引き寄せるようにし、勇者全員の視界に入る場所へと誘われ、

「神舞白奈ちゃん、私が新しい勇者部の部員としてスカウトしてきました～」

その言葉を聞いた瞬間、沈黙が駆け抜ける。

勇者と巫女、それぞれが沈黙を重ねる中、無情にも時計の秒針を刻む音だけが部室に響き渡っていた。

「……は？」

沈黙を破るように放つた赤嶺の一言も虚しく消え、誰も答えず、ただただ静寂が流れ、そこから驚愕と怒号が部室全体に響くまで約十秒かかったのだつた。

荒れ狂う部室。

ただ赤嶺だけが、響き渡る喧騒の中に取り残されていた。

第五話～乃木園子の魔の手～

神舞白奈ちゃん、私が新しい勇者部の部員としてスカウトしてきました。

流星が駆け抜けるかの如く、乃木園子から放たれた一言は勇者部部室を一挙に喧噪へと染め上げた。

推薦された本人、神前白奈こと赤嶺友奈はその衝撃的な事実に一言も発することなく、されど身動きする事すらも出来ない。

「ちょ、ちょっと乃木！ なんで部長である私に断りもなく新入部員の勧誘を!?」

勇者部部長、犬吠崎 風が乃木園子へと詰め寄る。小学生の園子はシノビの如く中学生の園子の後ろへと隠れた。

本来、部員が新入部員を勧誘する事には何も悪い点はない。

しかし、彼女たちは勇者部。

特別なお役目を担つた少女たち。

敵襲などが起きた際に樹海化の影響で勇者たちは樹海へと転移される。

この神樹が作り出した異世界でもその法則は変わらないので、一般人からすれば急に勇者部の部員が消えるという現象が起きるのである。

今までには身近に一般の生徒が居なかつたこともあつてか大きく話題になることもなかつたが、

目の前に一般人がいるときに樹海化で人が消失するという超現象を引き起こすのはまずい。

それを危惧しているのだろう。

「実は実は～勇者部にうつてつけのイベントが今月あるんよフーミン先輩～」
「それがこれなのです～」

ふふん、と鼻を鳴らして園子（中）は言う。

それに合わせる様に園子（小）が一枚の用紙を部員たちに見せつけた。

白の画用紙にカラフルな色で描かれていてその内容はこうである。

——讃州市中学校演劇コンクール開催のお知らせ

「讃州市の中学校の部活動がそれぞれ演劇を行うんよ、参加する学校は大きく取り上げられるし名実と共に勇者部の名を世に知らしめるチャンスだと思うんよ」

「だ、だから乃木？ そういうのはまず部長である私に話を通して——」

「優勝した部活動にはうどん無料券一年分を贈呈』するらしいんよ」

「やるわ！ 絶対出場する！ 名声欲シイ！ うどんが欲シイ！」

「白奈ちゃんの入部も認める？」

「認める！ 認めちやう！」

即落ちだつた。

即落ち2コマなみのスピード落ち。

うどんの魔力は計り知れない、この部長相手ならうどんをいくらでも送り付けてやれば苦悩の末に寝返つてくれそうだな、と赤嶺は思つた。

優勝商品であるうどん手に入れるがべく、この後は犬吠崎 風は校内中を奔走することになるだが。

そして勇者部部員も何故か景品のうどんに釣られていたのか滅茶苦茶ヤル気になつて いた。お前ら馬鹿か。

しかし、この大会の問題点は一つある。

赤嶺も最近知ったことだがこの学校には本職の演劇部が存在するのだ。そして大会に出場できる部活動は一つのみ。

本職の演劇部の者たちだつて多分参加したいと思うだろうし、ここで勇者部を参加させるような学校だつたら赤嶺はまず、この学校のモラルを疑う。

(いやあ……というか、この学校には演劇部があるんだし流石にその部を差し置いて勇者部が出場する事なんて不可能なんじゃ……)

内心、ケラケラと笑う赤嶺。

だが放課後、彼女を待つていたのは――、

「我ら勇者部が見事！演劇大会に出場する権利をもぎ取つてきたわ！」

勝利の笑みを浮かべて『出場』の二文字を書かれた紙を勇者部たちに見せつける犬吠崎 部長の姿だつた。

「おおー！大会に優勝して、必ずうどんを手に！」

「最高です部長！」

「部・長！」
〔オーサ・オーサ〕

「長・長！」

歓喜に震える勇者部部員を他所に赤嶺が一人だけ口をあんぐりとさせていた。

なぜだ。なぜこいつらにイベントが行わせたのだ、教師たちよ。

和氣あいあいと今後の展望を語る勇者部部員が騒ぐ中、赤嶺友奈は確かに瞳に捉えた。

——二人の乃木園子が薄暗い笑みを浮かべていた。

こいつら、家名使いやがつた。
〔權力〕

確かに旧世紀から神世紀にかけて大赦の中核と化している乃木家の名前を使えば、大

抵の事はまかり通つてしまふだろう。

小さな中学校に娘の居る部活動を出場させるように働きかけることも、造作もない。なんということだ、奴ら人間として腐りきつていやがる。

こうして、神舞白奈こと赤嶺友奈の勇者部入部と謎の演劇イベントへの参加が決まつたのであつた。

この時の赤嶺は少し注意散漫だつた。

赤嶺はストレスが原因の頭痛を発生させながら、乃木園子という悪魔二人から邪悪な視線を送られている事に気付かなかつたのである。



部活動が終了し、部員が解散したその後、

赤嶺友奈は人気のくなつた音楽室の椅子に座つた状態でロープに縛られていた。

「なんで!?」

思考するよりも先に声が出る。

そそくさに帰路につこうとした赤嶺の背後から何かが迫り、袋のようなものを頭に被せられてからそれ以降の記憶がない。

袋の内側で何やら甘い香りがしたあたりから眠くなつた気がした。睡眠薬か。

「んつふふ〜、逃げられないんよ〜」

「大人しくお繩についてください〜」

もうすでに繩についてんだけど。

そう内心で突つ込む赤嶺は自身を眼らせ、この音楽室へと連れてきた一人の少女を見据える。

中学生と小学生の乃木園子だ。

「もしかしてと思つてたけど、二人ともどういうつもりなのかな？事の次第によつては……」

意識を集中させて、本来の赤嶺友奈が持つ身体能力を開放しようと画策する。

勇者としての力を發揮すれば、この程度の拘束など一瞬に引きちぎれる、そう判断する赤嶺。

「ふふふ、そんなに急かさなくてもいいんだよ、赤嶺ゆーゆー！」

「…………つ？」

赤嶺が行動を起こすよりも早く発せられた乃木園子の一言に全身が硬直した。

彼女たちは神舞白奈が赤嶺友奈だと気付いていた。なぜだ。

その事実に驚愕を受ける。

「乱暴なことは余り好きじゃないんです。そこは理解して落ち着いてください」

小学生の園子が腰に手を当てて言う。なぜドヤ顔なんだ。

あと、この拘束されている状態は既に乱暴にされていると思うのだが気のせいだろうか。

「大丈夫だよ、赤嶺ゆーゆ。ここで白奈ちゃんが赤嶺ゆーゆだと知っているのは私たちだけさ〜」

「だけさ〜」

エコーがかかつたようにゆらゆらと揺れる乃木園子たち。

罠かもしれないが、正体を知られているのがこの二人だけだと知つて安息のため息をつく。

『よオし！ よくやつた乃木園子！ そのまま正体をバラされたくなかったら言うことを何でも聞いてもらうという条件で赤嶺ちゃんとイチャイチャしろ！』

中立神もお前たちの百合展開次第では人類の味方に付いてくれるらしいぞ！』

赤嶺の脳内で、造反神邪神が鼻息を荒くしている。少し黙つてなつて。

あとさりげなく中立神の名前を出すな。未プレイヤ者が困惑するだろうが。

強引に造反神とのリンクを切断した赤嶺は再度、中学生の園子に問う。

「なんで私だつてわかつたの？姿とか骨格も変わつてから普通は赤嶺友奈だつて判別

できないと思うんだけど」

うーんとね、と中学生の乃木は唸つて言う。

古波藏裏
「なつちと一緒にいる時の白奈ちゃんが、どことなーく赤嶺ゆーゆぽかつたからだよ」「

「なので、この問い合わせにもシラを切るようでしたらごめん、って謝つて素直に開放するつもりでした」

要はカマかけただけかい。

と、自身の変装術式を勘だけで見破られた事に赤嶺は肩をがくつと落とす。

流石は乃木の子孫、と言つたところか。

直感と閃きのキヤパシティは多分人類史上でコイツらが最強だろう。

推理ゲームとかやつたらヒントなんて与えなくとも第一部で犯人に言い当てる、そんな気がする。

「……何か目的があるんでしょ？　他の勇者部に私の正体を明かさないでここに縛つて連れてきたんだからさ」

本来、造反神の勇者である赤嶺は勇者部からは敵として認識されている。

園子たちが他の勇者に自身の正体の事を聞いていたのなら今頃20を超える勇者に、

束された赤嶺が囮まれているというリンチ五秒前みたいな状況が出来上がっているはずだ。

「実は……赤嶺ゆーゆには今度の勇者部で出場する演劇で、主役をもぎとつてほしいのです！」

(……は?)

「……は?」

赤嶺の脳内と現実で同じ言葉が発せられる。

にんまりと笑みを浮かべる園子たちは楽しそうに赤嶺を中心にクルクルと回りだした。なんだ、新手の煽りか?

「いやあ、せっかく赤嶺ゆーゆとなつちが一緒の学校に居れるんだし、楽しいイベントがあつたら楽しめるようにななくちゃいけないと思つてね！」

「演劇内容は”シンデレラ”、脚本はもちろん私たちなのです。このシンデレラのお姫様役を赤嶺先輩にやつてもらおうと思いまして！」

「だいたいわかつた」

どこぞの破壊者のように端的な返答をする赤嶺は園子たちの意図をある程度は理解したつもりである。

要は私たちのネタになれと。

園子たちが企画してこのぶつちぎりにふざけた演劇に参加して、勇者部同士でエモい掛け合いしまくつて小説のネタ帳を埋め尽くしてほしい、というわけだ。

やつてられつか。

などと、否定的な考えをしてみるとしよう。そうなれば、

「なつちに言うよ〜？」

「大人しく私たちのネタ……ほん、勇者部のイベントに参加するといいのです〜」

最悪だ。

赤嶺は某天才物理学者と同じように、今日という日を決して忘れないだろう。

イベントとという名の魔のゲームに参加しなければ、この讚州中学での赤嶺の生活は今日にでも終焉を迎える。

それはつまり、憧れである古波藏 棗と一緒に学校生活を送れなくなるという意味と同意。

赤嶺は生殺与奪を乃木園子に握られた状態であった。
抵抗の余地など皆無なのである。

赤嶺は園子の思惑通り、演劇・シンデレラに参加することになつたのだった。

「もちろん王子様役はなつち先輩だよ」

「乃木園子さん……あなたできるじゃない」

尊敬する棗とシンデレラの王子と姫を演じることが出来る。

それは赤嶺にとつて最大の喜びであった。

今でも、実際に演劇をやつていないにも関わらず棗に見つめられて舞踏会で踊るシーンを想像したら顔が熱くなるのを感じる。

その上で赤嶺は疑問に思うところがあつた。

それは、シンデレラの主役をやつてもらう、ではなく、もぎとる、という言葉だ。

「ちなみにお姫様の役は立候補者がいるから、演者候補で競い合つてもらつて、その勝負を制した者がお姫様役の権利を得ることにしたんよ」

脳内の疑問に答える様に中学生の園子が言う。エスパーかお前は。

彼女は続けて、

「イツつんとあんずんが”棗さんが王子様をやるんだつたらお姫様役は譲れない!”ってすごい顔で迫ってきてね！」

「だから赤嶺先輩のお姫様役は、二人と直にバトルしてがつちりもぎ取つてほしいのです！」

(……イツつん、あんずん。 犬吠崎 樹と伊予島 杏か……たしかにあの二人はお姉さまにゾッコンだつたけ……生意気な)

縛られている腕の先、赤嶺の拳に力が入る。

せつかく造反神から与えられた仮初の身体と敵である乃木園子から棗とお近づきになれるチャンス。

それをみすみすとどこぞのアイドルの追っかけ程度のファンに明け渡してなるものか。

赤嶺の瞳に闘志が宿った。

「やる気満々だね……そのつち、これは嵐の予感ですぞ……ビュオオオオオ!!!」

後日。

「園子先輩へ、メモ帳の貯蔵は充分ですか……ビュオオオオオオオオ!!!」

嵐を予感させると言いながら勝手に風を吹かせている園子ズなのであつた。魔法使
いかお前らは。

魔法使

砂塵が舞い上がる讚州中学のグラウンドで三人の少女がそれぞれ対峙している。ジャージ姿の少女たちは背伸びをし、軽い伸びをすると挨拶代わりと言わんばかりにこれから打倒する相手を見据え、刃の如き目力で睨み付ける。

「ぼつと出の新人が……棗先輩のお姫様は私です！」

「ワザリングハイツ……舐めないほうが身のためですよ？」

「あなたたちキヤラおかしくなつてない？」

一人は犬吠崎が妹の樹。

一人は西暦勇者、伊予島 杏。

一人は神舞白奈こと、赤嶺友奈。

龍（赤嶺）が、虎（杏）が、リスのような小動物（樹）がにらみを利かせ、ピリピリ

とした雰囲気はこれらの激戦を予想させる。

（お姉さま……あなたの為に、私は絶対にお姫様役を手にします……火色舞うよ）

赤嶺は御役目の際に口癖となっていたセリフを胸の内で口にする。

シンデレラ争奪戦の火蓋は、今まさに切つて落とされたのだつた。

果たして栄光は、一体誰が手に。